

Vol. 01 ヨーロピアン・グリーンキャピタル受賞都市
Lahti市の取り組み 18th September 2025

Speaker from LADEC

Director /
Business region development

Isto
Vanhamaki

Business development manager

Jari
Rask

ヨーロピアン
グリーン
キャピタルとは

LADECとは

選ばれるまでの
経緯

なぜ
お金のかかる
環境問題に
コミットできた？

Lahti市の
これから

EU が環境に優れた取り組みを行う都市を、毎年 **1** 都市選び表彰する公式な賞。
これに選ばれることは非常に名誉なこと。

Lahti 市などが出資して作った、地域産業の振興や国際連携を担う**地域政策公社**。

- ① **～1975：重工業で汚染されたまち**
工場排水で湖は汚れ、人口も増えてさらに汚染が進む
- ② **～1994：湖をキレイに!! 漁ができ、泳げる湖に!!**
・工場排水をやめる
・研究者、市民ボランティアで有害な魚を捕獲
・魚の放流
- ③ **～1996：水質改善を機にリサーチ機関ができる**
・ヘルシンキ大学環境生態学部ができ、研究者が集まってくる
▶サーキュラーエコノミーやE モビリティ分野のビジネスが生まれる
- ④ **～2018：97% のごみが再利用可能に!!**
・イベント、宣伝カー、子どもたちへの呼びかけ等で、回収したごみの
使い道を説明。地道な方法で市民へ理解を促す。
- ⑤ **～2019：石炭を使った火力発電をやめる!!**
- ⑥ **～2021：ヨーロピアン・グリーンキャピタルに選出!!**

多様な組織が連携する仕組み と 地域住民のコミットメント

学生・個人・企業が持つ
アイデアを
実現するには

誰とつながるか
が重要

つながりを促すのが
LADEC

円滑なコミュニケーションが
新しいビジネスを生み
環境への投資が可能に

Lahti 市では、地方自治体、企業、大学、研究機関など多様な組織が連携する仕組みづくりがうまくできている。
それをサポートし、ビジネスと繋げているのが LADEC という地域政策公社。

「交通のハブ都市」として**未来の交通を整備** = E モビリティ
インフラの充実

2030 年までに **Nature Positive City** に



about **Lahti**

人口：約 **12** 万人

フィンランドで **5** 番目に
大きな都市

氷河期にできた土地で
上質な**地下水**を使った
農業・飲料産業が盛ん

ヘルシンキから
列車で **50** 分
▶交通のハブ

大学との協業で
地域資源を
ビジネスに

INSIGHT

Lahti 市のような地方都市が受賞できたわけ

① **環境＝最も重要なファクターとして捉えた。**

環境を良くした上で「儲かる街」「暮らしやすい街」を目指す。
それが自律的に再生していく**リジェネラティブ・シティ**の原点。

② **街づくりのメインプレイヤーは誰か？**

ヨーロッパと日本では街づくりの仕組みが違い、地域政策公社のような
「街づくりのメインプレイヤー」がいる。これがあることで街づくりの内容も変わる。

ヨーロッパの環境先進都市にはそれが実現できたヒミツがあるはず！と思われ
がちですが、意外とそんなものはなく、日本の方がよっぽど工夫している
と感じます。ただそれが「伝わる仕組み」「制度」が弱いかもしれません。
これを改善し、**街へのコミット度**を上げるのがポイント！



Build Vision 吉田

【UNIVERSITY of CREATIVITY 近藤さんよりひとこと】

豊かな水と環境、交通の要所という地域資源を活かした、汚染された工業都市からグリーン
キャピタルへの 50 年のリジェネラティブチェンジ。そのキーフクターにあるのが、多様な
市民や企業の参加であり、そのための縦割りをつなぐ組織と楽しく参加を促すための創造性
の大切さを再認識。日本でも各地の資源を生かした循環や生物多様性、ウェルビーイングの
「一挙N得」なチェンジが増えることを期待してます！

【国交省担当者のコメント】

市民の意識を育てるには、派手さよりも地道な啓発活動の積み重ねなんですね。Lahti 市では、
工業汚染からの再生過程で「泳げる湖」を目指したことが、市民の意識を変える転換点となっ
たとのこと。個々の取り組み自体は日本の都市でも行われていますが、その徹底度と成果が、
人々の心に響く物語を生み出しているのだと思いました。